

カノジョ
姉ぶる初恋相手に絶対敗けない!

佐倉 唄



ファンタジア文庫

3009



カノジョ

姉^{ぶる}初恋相手に
絶対敗^けけない!

イラスト
佐倉 唄 なたーしゃ

ANEBURU KANOJO NI ZETTAI MAKENAI / Presented by Uta Sakura / Illustration by Natasha

口絵・本文イラスト
なたーしゃ

プロローグ

「チッ、この地獄のような日に、生後間もない命を捨てるクズがいるのか……」

気温は東北でも三〇度を超え、肌が痛く思えるほど直射日光が激しい高一の夏の日。

明日からの夏休みのことを考えていた俺は下校中、公園で一匹の捨て猫を発見した。

「にゃー、にゃー」

「そんな穢けがれなき瞳で俺を見るな。自らを捨てた人間に対する怒りが足りていない」

「……………にゃ? ふっ」

こいつ…………ツツ、鼻で笑ったのか!? 鼻呼吸の要領で!

「フン、まあ、いい。少々お前の瞳に戸惑ったが、もとより拾おうとして近付いたんだ」

「にゃ!? にゃー、にゃーっ!」

「静かにしている。死にたくなければ、大人しく俺の言うことに従え」

段ボールごと持ち上げて、そして公園の木陰から、学校の最寄り駅へ歩き始める。

だが駅に到着した瞬間、俺はあまりにも致命的な問題に直面してしまった。

「クソ…………ツツ、こいつと一緒だと電車に乗れない!」

「にゃあ……」

バカか俺は……ツツ！ こんな初歩的なミスで、里親探しが早々につまづくなんて！！

「あれ？ 柘原くん……だよな？」

「……佐藤？」

振り向くと、一人のクラスメイトがこちらを見ていた。

いわゆるベビーフェイスと呼ばれるような、少し幼げで、あどけない顔に、黒目がちで、くりつとした大きな瞳。

奇跡的に吹いた涼しい風になびく、流水のようにサラサラのロングヘア。

透明感のある肌は夏なのに雪化粧を施したようにとても白い。薄っすら汗ばんでいても、いい意味で夏らしく、爽やかで清らかな感じを覚え、イヤな印象は全くなかった。

かくも俺に声をかけてきたクラスメイト——佐藤真綾は小走りでこちらに寄ってくる。

「わっ、なんか学校の外で会うの、初めてじゃない？」

「そ、っ、そうだな」

なぜだ、今日は夏休み前日だぞ!? この類の女子は真っ先に下校して、駅前で友達と遊ぶはずではないのか？ 挙句、よりによって目撃されたのがこんな滑稽なシーンとは！

「それで、その子は？」

「ん？ ああ、猫だ、名前はまだない」

「柘原くん、この子、飼うの？」

「いや、残念ながら、俺が飼うのは現実的ではないだろう」

「にゃっ!?」

その時だった、猫が俺のワイシャツを爪でカリカリし始めたのは。

「おい！ やめろ！ 怒りではなにも解決しないぞ!」

「うゝん……、なんか、お前が言うな、って顔してるけど……」

カリカリカリカリっ

「えっと、ね、柘原くん？ 育てられないなら、連れて帰るのは、ちょっと……」

「フツ、それは違うぞ。憶測を真実として語るのは賢明ではない」

カリカリカリカリっ

「俺にこいつを見捨てる気はない。育てられないだけだ。この違いがわかるか？」

「ゴメン、全然わからないかも……」

カリカリカリカリっ

「にゃあ！ ふしゃー!」

「なっ！ バカ！ 跳ねるな、やめ………っ、んくっ、くち！ へくち!」

「……ふふっ」

醜態にも限度がある。クラスメイトに、こんなピエロのようなザマを晒すなど。

「ずび、スン——クツ、殺せ」

「いや、その、あれだね。柘原くん、猫アレルギーだったんだ」

「勘違いするな、目にゴミが入っただけだ」

「それって涙を誤魔化す言葉であって、クシヤミを誤魔化す言葉じゃないと思う」

「クツ、いや、待て、佐藤。俺が猫アレルギーか否かより、話すべきことは他にある」

「でも、どうするの？ その調子じゃ、飼うのは確かに無理そうだし……」

「里親を探す」

「猫アレルギーなのには？」

「勘違いするなと言っただろう。目にゴミが入り続けているだけだ。ゆえに問題はない」

「ああ、うん、じゃあ、それでいいけど、どっちにしたってつらくない？」

「確かに絶望的な状況だ」

「ならさ——」

「だが、炎天下に捨てられたこいつの方がよほど絶望しているし、救いを求めている」
さて、電車に乗ることが不可能な以上、別のプランに移る必要がある。

長居は無用か。俺は佐藤に背を向けると、そのまま日陰を求めて歩き始めた。

「どこ行くの？」

「日陰で夕暮れ時まで待機して、あとは帰るためにひたすら歩く」

「目にゴミが入り続けるのには？」

「ぐっ、ああ、そうだ」

「そこまで譲れないなら、親に車、出してもらったら……」

「母さんは今、普通に仕事 중이다」

「お父さんは？」

「いない」

マズいな。また無様な姿を晒す前に理解を得て離脱しなければ。

「これは俺のプライドに誓って真実だが——確かに俺は、こいつと一緒に暮らせない」

「えっ？ う、うん……」

「しかしだからといって、生後間もない命を見捨てる選択だけはもつとありえない」

伝えるべきことは伝え終えた。

あとはこのまま、互いに顔を見合わせる前に——、

「~~~~っつ、ちょ、ちよっと待って！」

「なっ!？」

佐藤に後ろからワイシャツの裾を掴まれる。

振り向くと、裾を掴んだまま、佐藤が上目遣いで俺のことを見上げてきていた。

「どうした？」

「もうっ、さつき、わたしも手伝うよ、つて言おうとしたのに。その子の里親探し」

「なん……だと……?？」

「柘原くん、他人の話、聞かなすぎ」

「……明日から夏休みだぞ? 協力してくれるのはありがたいが、正直、メリットはなにもない。猛暑だつてかなり続くらしい。友達と遊ぶ予定も、佐藤ならあるだろう」

「それは柘原くんもじゃないの?」

「俺の方はシンプルにプライドの問題だ! 損得の問題ではない! それに、友人に関し
て言えば心配も無用だ」

「えっ、なんで?」

「休暇中に遊ぶような友人なんていない。ゆえに問題はなにもない」

「気のせいかな? 問題しかなくない?」

「逆に、佐藤の方は?」

「まあ、実はわたしも似たような感じ、かな? 確かにわたし、友達みんなでプールとか夏祭りとかにも行くし、毎日協力できないと思う」

「なら、別に無理をする必要は——」

「けどね? 少しぐらい個性的でも、結局さ、男の子は優しいのが一番だと思う! だからわたしはキミに協力したいと思った」

なっ!?! くっ、佐藤の方こそ、かなりいい子すぎないか?

だが、勘違いしてはいけない……ツツ!

一瞬、恋愛的に意識してしまつた……。

だが、まだ出会って五分も経っていないのだから!

「いや、猫を保護しようとしたのは事実だが、俺は少し個性的というレベルではない」
流石にそれぐらいの自覚はある。

というより、自覚的にそう振る舞っている。

「一人でいることを望み、心の障壁を展開し、自らの領域に他者を寄せ付けない」

別に、本当の自分とやらを理解してほしいから、目立とうとしているわけではない。

小学生の頃にイジメられた。

その結果、誰に対しても絶対に臆さないと決めたただけだ。

その代償として、校内で変人と言われていることは理解しているが……。

「そんな自意識過剰で痛々しいヤツが俺だ。見てわからないのか？」

「見ればわかるよ、なんとなく、根は純粹なんだろうなあ、ってことも」

勘違いしてはならない。

なのに、そう言われて嬉しがっている自分も、否定できなくなってきた……ツツ！

「頼むから、そんな可愛い顔で優しいことを言わないでくれ」

「ふえ!?」

本当に優しい人は誰にでも分け隔てない。

なにも裏がないと理解できるからこそ、恋愛感情を抱くべきではないだろう！

「お——」

「お？」

「お願いだから、そんな顔で、可愛いなんて言わないでよお……」

言うと、佐藤は頬を赤らめて、純情可憐に恥じらった。

が、意味がわからない。

「そのルックスなら、男女を問わず、容姿を褒められることも多いのではないか？」

「流石にそんな思い詰めた顔でストレートに言われたのは、生まれて初めてですう！」

「だが事実だ。というより、論点がズレている。こんな振る舞いの俺に、本当に協力する気なのか？」

「うう、事実って……もお！ 柘原くんの方こそ、ツツコミどころが違くない!? まず、茶化さないと可愛いって言われたらすぐ嬉しい！ それで話を戻すけど、わたしは柘原くんの印象じゃなくて、やろうとしていることで、協力したいって思ったの！」

~~~~ツツ、認めざるを得ない。

目を見て、真っ直ぐ、力強くそう言われて——、

——正直、女の子として完璧に意識し始めてしまった。

「もちろん、できる限り両立はするよ？ でも、同じ友達同士でも、夏休みの間は柘……」

修一郎くんの方を優先しようと思いましたが——

「な、名前呼び、だど……? いや、冷静になれ！ 俺なんかと友達やっても、佐藤の評

判を落とすだけだ！」

「これはシンプルにプライドの問題です！ 損得の問題ではありません！ キリッ！」

「なんて強情なヤツだ……ツツ！」

「修一郎くんだけには言われたくないけど!? それに、そっちがそこまで気にするなら、友達であることを隠せば、問題はなにもない！ キリッ！」

なんだこいつ……、コミュニケーション能力の化物か？

「……佐藤、確かに協力してもらえば、俺もありがたいし、こいつのためにもなる」

「うんうん！」

「だから俺が訊きたかったのは、メリットは皆無だが、それでも、協力したいから協力してくれるのか？ ということだったのだが、改めて、まあ、あれだ……、その……」

「ん？ なになに？」

「——ま、真綾に、それを訊く必要はなさそうだな」

「うん、当然っ！ それで修一郎くん、早速だけど——」

「今度はなんだ？」

「その、ちよっぴり鼻水が垂れ始めて……」

「カッコ悪いところを見せたくなかったから、さつきは背を向けて去ろうとしたんだ！」

「あはは、そうだよね！ さつき、お互いに見せ合えるような顔、してなかったと思うし」

こうして、俺と佐藤真綾の関係は唐突に始まった。

時間にしても、恐らく五分程度のやり取りだったはずだろう。

だが、この瞬間、この場所——

## 第一話 問題はなにもない。 作戦開始だ。

オペレーションスケルト

自室のデスクにて、パソコンのディスプレイにカレンダーを表示させる。

何度見ても時が巻き戻ることはなく、今日は五月一〇日、火曜日だった。

「……ツツ、どうする!? 母さんが再婚して義理の姉ができるのは確定事項だ！ 家族になる相手とはいえ、同年代の女子と同居したら確実にモヤモヤされるだろう！」

夏が暮れて秋は枯れ落ち、冬が溶けて春も舞い散る。

季節はもう、桜が散ってラベンダーが咲き始める頃合いだった。

「しかし……俺が突発的に、あの佐藤真綾に告白しても、勝算は限りなく低いが……」

あと二週間で、あの七月二四日から一〇ヶ月が経つ。

結論から言えば、俺は真綾に初恋を捧げることになった。

「是非もない！ これ以上状況が不利になる前に、計画を前倒ししなければ……ツツ！」

無謀ということは重々承知している……っ！

優しくて、明るくて、誰に対しても丁寧に接して仲良くできる。

察してあまりあるが、真綾はクラスを中心人物で人気者だ。



容姿端麗で、笑えば可愛く澄ませば美しく、まさに女優レベルの美少女だろう。実際、一番異性からモテる女子というのは、優しく笑った顔が可愛い子だ。となれば必然、真綾がモテないわけがない。そして、つまりそれは越えなければならぬライバルが数多くいることを意味する。だがしかし——ツツ、

「……それでも好きな女の子を奪われたくはない！」

俺はいわゆる、劇場型の性格なのだろう。

小学生の頃に片親を理由にイジメられて、親にも相談せず、いつの間にか今に至る。優しさとは他人に自分の都合を強制するモノではなく、自分が他人に施すモノだ。だから別に、本当の自分を理解してくれる優しさを、他人に願ったわけではない。だがそれでも、だ。

真綾は上辺だけではなく、内面も見てくれた！

出会った時も、それ以降も。

天秤が釣り合っていないのは理解している。

しかしその上で、好きになったからには付き合いたいのだ！

「ふう、さて——戸籍上は姉弟といえども、同年代の女子と同居というのは、やはり印象

がよろしくない。そして肝心な母さんの結婚予定日が六月一七日の金曜日で、翌日に引越し……か」

姉ができるのには少々驚いた。

しかしだからこそ、焦らずに状況を分析するべきだろう。

現在、真綾の恋人の座争奪戦では戦況に変化が全くない。

恋愛に興味がないのかどうか、真綾が告白してきた相手を全員振っているからだ。

「他の男子の告白に対する真綾の反応は、告白できていない俺からすれば理想に近い」

となると、優先的に考える必要があるのはライバルの方だ。

ステレオタイプだが、メジャーな運動部に所属している男子は受けがいい。

だが彼らの中でも、特にトークスキルとルックスに優れていなければ、周囲に恋敵、障害とさえ認識されづらいだろう。

要するに、俗に言う陰キャ、あるいは変人には未来永劫、佐藤真綾との青春は訪れない。

そのように思われているわけだ。

対してこちらはその変人に該当するだろう。

不幸中の幸い、俺の学年末テストの順位は上から数えた方が早い。

だが結局、頭の良さというのは人付き合いの上手さがないと、評価されても好印象には

ならないモノだ。

人付き合いの上手いガリ勉のことを秀才と呼ぶし、逆もまた然り。

顔も普通で、髪も服装も清潔にしている。

ただ空気を読む能力がないと、それだけで同一の事実でも悪い印象で結論付けられるのがコミュニティというモノだ。

「ハア……」

イジメられてこの性格になり、今は一応、面と向かってなにかをされることはない。

もちろん、それは俺の望んだ結果だ。とはいえ、スクールカーストの下位にいるというのは、恋愛面では明らかにマイナス要素だろう。

クラスメイトとでも明確な用件がないと話さないぐらいで、彼我の戦力差は歴然だ。

「一般的に同じ家に住み始めたその瞬間、義理の姉を恋愛の対象外として認識できるわけではない。俺が否定しても、真綾は確実に拗ねるだろう。となれば、余裕を持って一七日の三日前、一四日に告白計画を実行する」

と、その時、スマホと同期させてあるパソコンに、真綾からのメッセージが届いた。

そして彼女によってニヤン次郎と命名された子猫の写真も。

「まあや …… みーちゃんの家でたわむれてきた！

修一郎 …… ニヤン次郎は元気にしていたか？

まあや …… 問題はない（キリッ

まあや …… 修一郎くんも、もつと会ってあげたらいいのに……。

修一郎 …… なぜかあいつは俺に懐いているからな。目にゴミが入りすぎる。

修一郎 …… それに、白崎しろさきの家には定期的に食事を配達している。

修一郎 …… ゆえに問題はない。

まあや …… そういえば、なんでキャットフードじゃダメなの？

修一郎 …… 猫も人間と同じだ。エネルギーや炭水化物、タンパク質や脂質、

修一郎 …… ビタミンやミネラルなどを摂取するために食事をしている。

修一郎 …… 保存料はできる限り入っていない物の方が望ましいだろう。

まあや …… 毎日コンビニのお弁当だけだと不健康になりやすい、みたいな？

まあや …… 修一郎くんはいいお父さんになりそうだね♪

修一郎 …… 育てられなくても拾ったのは俺だ。食事ぐらい保障しなくてどうする。

修一郎 …… それと、父親になるためにはまず、こんな変人と結婚する相手が必要だ。

まあや …… いると思うよ、修一郎くんとなら大丈夫、って考えてる女の子。

まあや … 男の子って、お顔とかスポーツとか、いろいろあると思うけど、まあや … 前も言ったけど、少しくらい個性的でも、結局、男の子は優しいのが一番！

少しくらい個性的でも、結局、男の子は優しいのが一番、か……。

「慰められて心が痛い」

改めて考えてみれば、真綾のタイプが優しい男の子。そのような可能性も確かにある。だがそうでなければ『取り柄がなくても優しさだけで女の子と付き合えることは一応、ないわけではないよ！』『だからファイトだ！』と気を利かせてくれているのだろう。

そこで再度、真綾から画像データが届く。

「なっ!? これは!?」

まあや … じゃんじゃん、みーちゃんから借りて、猫耳を着けてみた自撮り！

まあや … 仲間を見付けて、これにはニヤン次郎もご満悦のよう。

「ニヤン次郎……ッッ！ 俺の最大の敵はお前か!」

画面に映る猫耳+ラフな部屋着で、ニヤン次郎を抱きしめてゴロゴロしている真綾。

クッ、れ、っ、冷静になれ！

真綾がこの写真を保存しない可能性や、誤って削除してしまう可能性もある。

バックアップを取っておいてデメリットはないはずだ。

「まあ、いい。この程度で取り乱す俺ではない。計画のファーストフェイズを始めよう」

修一郎 … ところで真綾、来月の一四日の放課後、なにか予定、入ってるか？

まあや … 大丈夫！ 空いてる！ けっこう先のことだしw

まあや … どっかに遊びに行く？

まあや … ていうか、珍しいね、修一郎くんの方から誘ってくれるなんて！

修一郎 … ああ、映画のチケットを友達からもらったんだ。

修一郎 … もしよければ、一緒に見に行かないか？

まあや … OK！ 楽しみにしているね♪

まあや … でも……『友達』から映画のチケット、もらったんだ〜？

しまった……。この反応、まさか、他の女子との関係を疑われたか？

俺と放課後に遊びに行くような相手、真綾しかないというのに……。

修一郎 … 言っておくが男子だぞ？  
 まあや … そうじゃなくて、わたし以外に友達いたの？

「……臆するな、俺、まだ抗<sup>あらが</sup>える」

修一郎 … 悪魔の証明を知っているか？

修一郎 … なにかが存在していない、ということを証明することは非常に難しい。  
 まあや … 修一郎くんは友達ができたなら、わたしの耳に届かないわけがないと思う！

「チッ、ダメだ、情報戦で勝てる気がしない！」

修一郎 … 学校の外でできたという可能性は考えないのか？

まあや … いっぱいわたしと遊んでるんだから、外で友達作る時間ないでしょ？

「……きよ、今日のところはこれぐらいにしておくか」

修一郎 … それでは、そろそろ寝かせていただく。また明日、学校で。

まあや … 今日は寝るの早いねw

まあや … また明日、学校で！

まあや … おやすみなさい、修一郎くん♡

修一郎 … ああ、おやすみなさい。

「ふむ、本当は夕暮れの教室で告白する予定だったが……行き先を訊かれて教室と答えるのは肩透かしだからな。やむを得ない。計画を変更して、今から前売り券を購入しよう」  
 ここで教室に居残るよう頼んだら、確実に怪しまれていた。

それに、よく考えれば呼び出しするのに教室を指定するのも危険だったか……。  
 真綾自身にこちらの思考が読まれやすく、なにより、不確定要素が乱入しやすい。

「さて、幸いにも俺たちは連絡手段も確立しており、放課後に二人で遊べる関係も構築し終えている。この前提がある以上、プランをセカンドフェイズに移行しても問題はない」  
 あとは真綾の反応を確認しつつ随時、プランに修正を加えれば――、

――告白のうちに、俺の初恋は成就<sup>じゅうじゆ</sup>される。

「問題はなにもない。だから、作戦開始だ」



そして訪れた六月一四日の放課後――、

仙台駅の構内、待ち合わせ場所であるスタンドグラスの前にて――、俺はスマホを使い作戦に必要な情報を最終確認していた。

計画は完璧。

晴天で、天気予報を改めて確認しても、降水確率は〇%だった。

映画を観終えた頃には、ちょうど良く夕暮れ空が綺麗に広がっているだろう。

俺がこの前に買った本『恋愛にも使える脳神経科学』に書いてあった！

人は夕方から深夜にかけて、副交感神経が働きリラククスし始める傾向にある。

だが人間は自分のことだろうと、それらをリアルタイムで全て知ることはできない。

つまり夕方だからリラククスしていても、この人が隣にいるからリラククスできるんだと錯覚することもあり、それを恋愛に利用することも可能……らしい！

それに今日の最終目的の地も問題なく営業中で、会話のネタのストックも完了している。

正直、やたら突発的なイレギュラーが発生しない限り、告白の成功は約束されていると言っても過言ではないだろう。

「あつ、修一郎くん、お待たせっ」

「いや、俺も今来たところだ」

「あゝ、一緒に電車だったのかなあ？」

「悪いな。並んで帰る姿を見られると……」

「ふふっ、そうだよねえ、質問攻めにあっちゃうし、そしたら、遊ぶ時間も減っちゃうし」

「なら、時間ももつたないし、行こうか？」

「おっけい！」

促すと、真綾は俺の横に並んでくれて、そのまま二人で映画館を目指し始めた。

穏やかな気持ちで声を弾ませ話しながら、放課後の駅前を相手の歩幅にあわせて進む。

客観的に見ても、かなりいい雰囲気のアタリを切れたと言えるだろう。

そして映画館に到着すると、まずはチケットカウンターにて前売り券と入場券を交換した。そのあと、二人でフードカウンターに並び仲良くお喋りする。

「修一郎くん、飲み物はなににする？」

「コーラだな。ポップコーンはどうする？」

「食べたいけど……一人じゃ終わるまでに食べきれないから、一緒に食べてくれる？」

「わかった。あと、ポイントが溜<sup>た</sup>まっているからそれで払うよ」

「うん、ありがとっ」

数分後、会計を済ませて飲み物とポップコーンを持ち、俺たちはスクリーンに向かった。

そして二人並んで座り、スマホの電源をオフにする。

「電源、オフにしているのか？」

「友達になにか訊かれても、電車で寝過ごしちゃった、って答えるから大丈夫♪」

ちなみに、俺が選んだのは王道中の王道である青春恋愛映画だ。

言い換えればテンプレート気味でわずかに迷ったが、ここでわざわざ変に定石を外す必要もないだろう。

それに、驚くことなかれ！

俺は事前に一人でこの映画を観ておいたのだ！

断言するが、あまり観ないジャンル特有の新鮮さを除外しても、料金以上に面白い。

さらに、言っても聞いても悶<sup>も</sup>えるようなことだが、本当に大切なことは別にある。

真に一番大切なこと、それは相手と並んで映画を観ているという事実自体だ。映画館か

ら出たあと、駅前を歩きながら感想を言い合えればモアベターである。

そして上映開始して、さらにそこから数分後――、

――ウソ偽りなく偶然、どちらともなく肘と肘が接してしまったのがキツカケだった。

「――んっ」

「……むっ」

まずは真綾の方から、今度は手の甲同士を、恐らく意図的に触れ合わせた。

察するに、上映中でもお構いなく、じゃれ合いたくなったのかもしれない。

ただシンプルにそれが楽しいから。

十中八九、そのような理由だろうが、時々真綾はこういうことを仕掛けてくる。

他の観客にバレるかもしれない。

なんて一瞬だけ逡<sup>とん</sup>巡したが……いや、他の観客は映画に集中しているし、極論、知り

合いいないのだから、バレても特に問題はないか。

俺はその攻撃から戦略的撤退を試み、次に、手薄になっていた真綾のローファーを、自

分の靴の爪先でつついた。

しかし、真綾は居直るように全身を俺の右側から寄せてきて密着反撃を開始。

俺は男性で、女性と比較すると当然、外股気味だ。

そのこともあり、このままだと靴どころか、互いのふくらはぎや膝まで触れ合ってしまう可能性が出てくる。

再度、戦略的撤退を試みた俺は、手持ち無沙汰をアピールするように、右手で頬杖を突く。

籠城戦だ。これで右手、右腕に小競り合いを仕掛けることは格段に難しくなった。さらに上半身が真綾の方に傾くことにより、両脚は真綾の脚が届きづらい左側に移行する。

完璧だ。

あまりにも完璧な作戦だ。

「————♡————」

「……………っ」

そう、真綾まで俺の方に身体を預け——、

——寄り添い合っている状態になってしまう展開を除外すれば。



「面白かったね、映画も、じゃれ合うのも」

「クッ、他の観客の迷惑にならないよう、俺があえて、自ら棄権したことだけは忘れないでいただきたい……っ」

「ふふっ、はいはい。照れちゃったんじゃないかって、戦略的撤退、なんだよね？」

「と、っ、当然だ。映画を楽しむという終わりにさえ辿り着ければ、その方法に執着する理由もないだろう」

地上三一階、仙台でも有数の展望台にて——、

俺と真綾は煌めく夕日と、茜色に染まる空を眺めながら雑談していた。

他に利用者は誰もおらず、完璧に地上から隔絶された、二人だけの空。

「今日、誘ってくれて、ありがとね」

「……礼には及ばない。いつも、真綾の方から誘ってくれていたからな」

恐らく、真綾は純粹に目の前に広がる赤らんだ街並みを楽しんでいるのだろう。

実際、俺の目から見てもすごく綺麗な光景だと感じる。

とても広大で、なのに物静か。

いつも遊ぶ街を空から眺めているからか、非現実的というか、とても空想的だ。

「ここに、なにか用があったの？」

「……いや、正直、人混みに疲れたただけ。申し訳ないと思うけど、もう少しだけ、一緒

「ここにいてももらってもいいか？」

「もお、しょうがないなあ——でも、わたしも休憩したかったし、どうせ休むなら、静かで、景色が綺麗なところの方がいいよね」

「ありがとう、助かるよ」

「礼には及ばない、キリッ！」

「……おい」

「ふふんっ」

筋違いとは理解していても、俺はどこか咎めるような視線を真綾に送った。

しかし、真綾は自信満々な表情で俺に目線を送り返し、いわゆるドヤ顔を炸裂させる。

「真綾」

「なに？」

「手を繋ぐなんて、フツ、天空の世界が怖いのか？」

「えー、親友なら普通じゃないかな？ 女の子同士だとけっこうみんなと手、繋ぐよ？」

つまり、これは特別な人とのみすることではない、ということか。

「それに、確かに高いところ、怖いから、さ？ 手、繋いでてもいいよね？」

「~~~~っ」

「あれえ？ 修一郎くん、顔、赤くなってない？」

「夕日が世界の全てを深紅に染めているだけだ」

「目にゴミが入ったんじゃないか？」

「いつまでそのネタを引っ張る!? 目にゴミが入って顔が赤くなるものか！」

「えー、目にゴミが入ってクシャミしちゃう男の子に言われたくないなあ」

好きな女の子にからかわれて、多少は気恥ずかしい。

だがそういうじゃれ合いも含めて、全ては俺の予想の範囲内だ。

不測の事態も一切起きることはない。

だから静かで、適度な明るさで、周囲に誰もいない状況を作り終えたのも必然だ。

それに『恋愛にも使える脳神経科学』の続編である『恋愛にも使える生理学&性科学』

にも書いてあった。

やはり人は錯覚する生き物だから、吊り橋効果や遊園地のお化け屋敷、心拍数が上がる激しいスポーツなどは恋に有効だと！

この書籍の情報に従い、このような景色が綺麗な高所まで真綾を誘うことができた。友達という形と言葉に終止符を打つのは今しかありえない。



告白するんだ、この瞬間、この場所で！

「真綾、伝えたいことがあるんだが……」

「どうしたの、改まって？」

「俺、実は——」

——待て。

俺はこの作戦において限られた時間の中で、我ながら目を見張るようなシチュエーションを構築することに成功した。

しかし、それで真に完璧な計画と言えるのか？

本当にこれは、なに一つ問題のないシチュエーションなのか？

いや、違う！

実際、俺の羞恥心を除外しても、問題がなかったわけではない！

特に今回、俺は放課後に映画館に行く、というプランを採用した。

人は暗所だと瞳孔が広がり、その状態で異性が映れば魅力的に見えてしまう。

『恋愛にも使える生理学&性科学』にもそう書いてあったし、メリットは多い。

だがその反面！ 二人で会話した時間は経過時間と比較して驚くほど短かった！

……っ、どうする？

完璧ではない計画を実行するか否か。

いや、これも違う……ッ！ 重要なのはそこではない！

最優先で考慮すべき結末は、この瞬間、真綾に振られてしまうバッドエンドだ！

それは——、っ、イヤだ。

自分の想いを伝えたいから伝える。

だが、それで相手の心情を考えられているのか？

先月にも自分で考えただろう。

優しさとは他人に自分の都合を強制するモノではなく、自分が他人に施すモノだ。

焦るな。相手のことを考える。

みつともなく自分の気持ちを一方向的に伝えて、それで相手に不愉快に思われたら本末転

倒ではないか！

問題が、気がかりがあるなら慎重になれ。

告白が迷惑になる。そういうケースは恋愛弱者の俺でも聞いたことがあるだろう！

脚が竦む。

喉が渴き、それを生唾で誤魔化す。

情けない限りだが、だからと言って否定はできない。

怖いのだろう、自らの言葉を拒絶されることが。  
ならば、決まりだ。

問題があるということは即ち、まだ最善手が確実に存在しているということだ。切り札になりうる希望を温存したまま終わるなんて、そんな間抜けは許されない……ツツ！

『焦燥感』

これを理由に、余裕もなく先走るぐらいなら——ツツ、

「あれ？ 修一郎くん？」

「——ああ、実は、その……親の再婚で、義理の姉ができることになったんだ」

「は？ えっ？ あっ、そ、そうなんだ……」

「だから俺も引越すことになって……学校との距離はむしろ短くなるらしいが、真綾が遊びに来た場合、義理の姉と会うこともあると思う」

「へえ、修一郎くんって、確かにお兄ちゃんよりも、弟って感じがするもんね」

……おかしい。なんだ、この違和感は。

大局的に考えた結果、告白を延期した。

とはいえ、真綾からしてみれば確実に告白を察することができるとはさすがだ。

俺と両想いなら寂しさや不甲斐なさが、俺の片想いなら告白を回避した安堵感が。

程度の差こそあれ、表情として浮かぶはず。

なのに、俺をいつもよりからかっているこの感じはなんだ？

「それでなんだが」

「なにになに？」

「いくら俺の環境は変わるだろう。だがそれでも、これからも真綾とはこうして、遊んだり、話したりしたい。それだけは、せめて伝えたいと思ったんだ」

「当然っ！ 一番の親友が勇気を出して、素直に伝えてくれたことだもん」



「失敗した！」

マンションの階段を苛立ち混じりに踏みつけるように上りまくる。

「失敗した失敗した失敗した失敗した失敗した、失敗した……ツツ！」

そして三階に着くと一番端を目指して廊下を進む。

角部屋の前に着くと、今度は鍵を開けて中に入った。

「あっ、おかえり、しゅーいちろー」

「あれ？ だいま、母さん。今日は休みだったのか？」

「社内カレンダーとかいう悪しき風習があるからねえ」

「わかった、少し休んだら夕食を作る」

多少のやり取りはするがリビングには行かず、俺はそのまま自室に向かった。

「バカな、ありえない!? 確かに計画は完璧ではなかった。だがそれ以上に、人の心は〇か一かの二元論ではないだろ！ それでも、もしあの時、拒絶されたらと思うと、恐怖しか浮かんでこないのも事実で……。怖気づいたというのか、この俺が……ッ」

ひとまずカバンをベッドに放る。

そして乱暴にデスクチェアに座り、衝動的に台パンを——ッ、

「チツ、いや、待て。物に当たるのは賢明とは言えないな。それに、騒々しくすれば母さんに不愉快に思われる確率が高くなる。こちらとしても、このタイミングで干渉されるのは望ましくない」

俺は勢いよく立ち上がる。

次に本棚の前に立ち、『恋愛にも使える脳神経科学』を始めとする恋愛マニュアルやら、デートのコツやら、デートの流れやら、ファッション誌やら……、  
そういう書籍を次々にフカフカのベッドに叩き付けた。

「——すべて潰れる、愛を記した人類の叡智よ」

恋愛のノウハウ本は、ぼす、ぼす、と、気の抜けるような音でベッドにダイブし続ける。もうダメだ、俺は……。もとからかもしれないが……。

「致命的だ、他人に好意を伝えるのが怖すぎる！」

床に膝を突いて、絶望にも等しい結果に俺はうなだれた。

そして今度こそ、床に拳を叩き付けようとしたが——、

「ハァ……、下の住人に迷惑をかけて、苦情が来ても困るな。やめておこう」

ガバツ、と、俺は顔を上げるとフカフカのベッドに拳を振り下ろす。

無機物に憤りのあまり握り締めた拳を受け止めてもらっても、微塵も嬉しくなかった。

「なんとという体たらくだ……。論理的で大局的なアプローチが、感情的で一時的なアピール、告白の不発——いや——勇気の欠落で破綻するなんて」

ふと、俺は先刻、ベッドに叩き付けた本を回収し、目当てのページを開いた。

が、それを確認すると俺は再度、その書籍をベッドに叩き付ける。

「ハァ、告白の成功率を上げるおおまかな傾向など、とつくに把握している。俺がどれだけその類のサイトを巡回したと……。俺が知りたいのは告白の発音方法だ……」

その時だった、母さんの声がドアの向こうから聞こえてきたのは。

「ええ、つと……あゝ、失恋でもしちゃった？」

「違う！ コホン、まあ、あれだ。その場の判断にわずかな誤りがあったとはいえ、大局的に考え、決着を保留にただけだ。現状維持であり、幸いなことに敗北ではない」

「あつ、はい。なら、そのお、今日の夕食当番、代わる？」

「必要ない。自分に与えられた役割は必ず果たす。それがコミュニティというモノだ」  
次こそは成功させる。

どれだけチープな言葉だろうと、関係ない。

告白で一番重要なのは結局、恐怖を超えるほどの勇気ということか。



先々月、始業式の日の夜、母親から「再婚したい人がいる」という旨を伝えられた。

三三歳だし、そういう相手がいっても不思議ではないだろう。

いや、母親に使うような感想ではないかもしれないが……。

相手は以前から紹介されていた、同じ会社のプログラマーの佐藤真尋さん。

まあ、いつまでも俺がいるから再婚できない、というのでは罪悪感が湧いてくる。

それで「母さんが再婚するのに、俺の許可なんて必要ないだろ？」と伝えて約二ヶ月後の六月一七日、金曜日の夜――、

「真尋さんとは何回かお会いさせていただいたが……正直、気まずいな」

「そう？ 気にしすぎだよ」

ついに義理の姉となる相手と出会う瞬間が迫っていた。

来るべき会食に赴くため、俺と母さんは仙台駅前を歩き続ける。

「いや、明日は一日中、引越越して忙しいはずだ。しかし明後日には確実に、初対面で同年代の異性と共同生活が始まる。俺自身が戸惑うことも多々あるだろうが、相手の方がより複雑な心境に違いない。配慮せねば」

「ええ、そうかな？」

母さんは気楽に考えているようだが、俺の考えは違う。

確かに世間体というモノもある。だが、それは視線を気にする理由であり、根本的に恋愛の対象として認識することを自戒する理由ではない。

ただそれでも、相手が義理の姉だろうと、一般的には恋愛の対象にはなりえない。いや、厳密には、あまりしてはいけない。

もちろん、法的には結婚が可能なのだから問題はないだろう。

しかし、冷静に相手の立場になって考えればわかる。  
明後日から大義名分を得た見知らぬ男性が同じ家で暮らし始めるのだ。  
となれば普通、自分の家なのに、心休まることも少なくなるだろう。

それに……他人に親切にしないと、巡り巡って居場所を失うのは自分だからな。

「まあまあ、向こうがぜひ、修一郎くんとは一緒に暮らしたい、って言ってきたんだし」

「ん？ 社交辞令ではなくてか？」

「お世辞だったら、ぜひ、とは言わなくないかな？」

よく考えてみれば、向こうの意図が読めない。

俺の方は姉の件について「同居するか否かは向こうの判断に任せる」と返した。

だが一般的に、女性は何対面の男性と一緒に暮らすなんて、相当不快なはずじゃ……。

「目先の問題に集中しすぎたか……。なぜ断ることもせず、そこまで積極的なんだ？」

「いやいや……。もうすぐ本人と会うんだし、直接訊けばいいじゃん」

ちやうどその時、俺と母さんは件の寿司屋があるビルの前に到着した。

中に入り、エレベーターに乗って四階の寿司屋へ。

続いて母さんが店員さんに予約していた名前を伝えると、店の奥の座敷に案内される。

「佐藤様、お連れ様にご到着なされました」

「あつ、はーい」

襖ふすまの向こうから男性の声が聞こえてくる。俺の義理の父親になった真尋さんの声だ。

そして襖が開き、俺は真尋さんと、その隣にいた女性を見て——愕然がくぜんとした。

「……………ツツ、真、綾……………っ？」

「こんばんは、修一郎くん」

バカな!? なぜ真綾がここにいる!? なにかのドツキリか……………?

「修一郎、とりあえず座ろう？」

「あ、ああ」

いつまでも立っていると訝いぶかまれるのは理解できる。

で、座らせていただいたが……対面の席には真綾がいる。なんだ、この組み合わせは？

「修一郎くん、こんばんは。もう真綾から聞いていると思うけど、これからは姉弟として

も、真綾と仲良くしてくれると嬉しいよ」

「は……………？ 姉弟、ですか……………？」

おかしい。俺は至極当然ことを聞き返したはずだ。

なのになぜ、母さんも真尋さんも、不思議そうな顔で俺を見る？

「あれ？ 真綾から聞いていなかったかな？」

「お父さん、修一郎くんを驚かせたいから、わたしが自分で伝えるって言ったでしょ？」  
「えっ？ うん」

「でも言葉で言うより、実際にお父さんと一緒にいるわたしを見せた方が、驚くかなあ、  
って♪」

「ええ……、ご、ゴメンね、修一郎くん。真綾が変なイタズラしちゃって……」

「い、いえ、お氣遣いは不要です……」

やってくれたな、真綾！

イタズラに成功してそんなにニマニマしやがって、可愛<sup>かわい</sup>すぎて咎<sup>とが</sup>められないだろうが！  
チッ！ これは流石<sup>さすが</sup>に動揺しない方が化物だ。

この俺がここまで冷静さを奪われるなんて……ツツ！

とはいえ、もう全てを理解した。

真実はいつも一つ。

しかし、その解釈は千差万別だ。

件の真実を、真綾がどのように受け取ったかはわからない。

<sup>ひるがえ</sup>翻<sup>ひるがえ</sup>り、俺にとってそれは絶望の象徴。

つまり、俺の義理の姉になる女性は――、



「それじゃあ改めて——この度、修一郎くんのお姉ちゃんになった佐藤真綾です♪ 趣味は読書とゲームとカラオケ、あと、カメラと天体観測。特技は家事全般とピアノ。これからはクラスメイトとしてだけでなく、姉弟としても、よろしくね」

「ええ、つと……、佐藤、修一郎……、です。まあ……、その……、これから、あの……、よろしくお願いします。姉弟としても仲良く……」  
しまった。

真綾が俺にドッキリを仕掛けてきたということは、多少の愉快な反応は許容される。

しかし、それにしたって、あまりにも頼りなさすぎるリアクションをしてみましたか。

「なんか修一郎と真綾ちゃんのお見合いみたいですねえ、真尋くん」

「そうですね、修花さん」

クツ……、息子として、母親の幸せは喜ばしく思う。

しかし、前言撤回だ……っ！

俺は義理の姉と結ばれてみせる。

同じ家に住む以上、気持ちが悪ければ間違いなく警戒されるだろう。

だから絶対にバレるわけにはいかないが——それでも、俺は絶対に諦めない！

## 第二話 最悪の窮地に立たされたことは、諦める理由にはならない。

六月一九日、日曜日の朝——、

俺を微睡まどろみから解き放ち、光の差す世界に呼び戻したのはエプロン姿の天使だった。

「おはよう、修一郎くん」

「真、綾……？」

「えっ？ もお、寝ぼけ過ぎだよ？ わたし以外の誰に見えているの？」

白くて大きめの萌え袖パーカー&ホットパンツ w. 家庭的なエプロン。

尊い、なんだこの女性は？ 佐藤真綾か？

「なぜ、真綾が俺の部屋に……？」

「なぜって……家族になったんだよ、わたしたち」

恐らく真綾がカーテンを開けたのだろう。爽やかな日の光が差し込んでいた。

「あつ、朝ごはん、作っておいたから、早く食べよう？」

「……………」

「んっ？ まだ眠いの？」

「そうか……、これは夢だ。そうに違いない」

「いやいやいや!? わたしたち、もう家族でしょ!?」

「まほろばの夢は泡沫うたかたのように、いずれ消えゆく」

「ええ……、寝ぼけていてもその中二言語、喋しゃべれるんだ……」

「ああ、そうだ。これは俺を片親の子ともだと見下して、愚かにも嘲笑あざわらってきた雑魚共ざごを討つために創造した剣にして盾。しかも肉体融合型だ。おやすみなさい」

「なんでこんな平和な朝にシリアスな過去を投下するの!? こらあ、起きろお!」

「こんなにもあたたかで幸せな家庭の夢、覚ますぐらいなら夢の中でも起きるものか」

「ほえ!? そ、そんな、大袈裟おおげさな……」

「む、うう……、んっ……」

「潜っちゃダメ! つていうか、本当に家族、姉弟になったでしょ、わたしたち」

わたしたち……、家族……、姉弟……、は?

姉弟……っ!?

「あっ、起きた。おはよう、修一郎くん」

「いや、実は先ほどから少しは意識があったが、おはよう、真綾」

「全然、実は、じゃないけど、えっと……、どうしたの?」

「思い、出した……ッッ!」

「あ、そっか、覚醒したんだね、意識が。はいっ、寝ぼけるのは終了!」

「真綾」

「んっ? なになに? お姉ちゃんにお話ししたいことあるの?」

「おやすみなさい、闇に飲まれる」

「えっ? うん、おやすみなさ……って、もお、潜るなあ! 闇に飲まれるなあ!」

「そうか……、これは夢だ。そうに違いない」

「さっきと声のトーンが違うんだけど!? こらあ」

やたら上機嫌で嬉うれしそうに真綾が俺からシートを強引に奪った。

俺は最後までシートを掴つかんで抗あがったため、引きずられるように真綾の方に転がるが、

「………ッッ」

「んっ? どうかした?」

真綾、いくらなんでも無防備すぎる!

中腰の姿勢のせい、パーカーの隙間から真綾の胸の谷間が見えてしまっている。

やはりそれは雪化粧を施したように色白で、正直、同じクラスの他の女子と比較しても



かなり大きく膨らんでいた。

しかも動くたびに揺れる。かといって目を逸らしたら、姉になった相手をそのように認識している。そう露見してしまう可能性も否定できない。

——ん？ 待てよ？

「おい、朝ごはん、本当に冷めちゃうよ？」

「——、ああ、流石にそろそろ起きるよ。冗談も、そろそろ終わりだ」

冷静になれ。状況の分析が最優先だ。

現在進行形で真綾の胸元は正直、ベッドの上で起き上がっただけの俺には見えている。が、なぜかは知らないが、奇跡的に真綾には自覚がない。

端的に言えば無防備すぎる。

信頼し合っている親友という自負もあったが、それを除外しても全く警戒されていない。

まさか、そういうことなのか？

真綾は俺のことを——、

——すでに弟、恋愛の対象外というカテゴリーに入れてしまったということか!?

やられた……ッ！

考えてみれば自明のことか！

真綾は俺よりも先に俺たちが姉弟になるという情報を掴んでいた。

ならば俺のことを弟として認識する準備期間が、すでに終了している可能性も……ッ！

「ポ……としてるけど、熱でもある？」

「いや、頭に酸素が回って、な……!？」

真綾は俺の顔に自分の顔をあてるが……今度は胸の谷間が覗けるだけではない。

真綾の唇が、あと少し近づけばキスできる近さにあった。

「熱はないみたい」

「まあ、あれだ。普段運動していないのに、昨日はよく動いたからな」

確かに、他の男子相手にもこのガードの緩さを披露していたら率直に、心配ではある。

しかし、こちらとしても警戒されると厄介だ。

もう俺たちは、姉弟になっても警戒されると厄介だ。

好きな女の子の素肌だからな。

そしてだからこそ、動揺を、看破されるわけにはいかない……ッ！

「それじゃあ着替えるから、その……」

「あつ、そ、そうだよ。わたし、下で待ってるね？」



あれから約六時間後の午後の二時、俺は仙台駅前のカフェにいた。前の家に忘れ物をしたかもしれない。

そういう建前で、俺は一人で考え事をする時間を設けることにしたのだ。予告もなく、初恋の相手が義理の姉になる瞬間に、それを知ったのだ。

そしてあれからまだ二日。

「心の整理が付くまで残り続けてみせる！ ……四一〇円のドリップコーヒード」よし、改めて状況を整理しよう。

まず、俺の母親、柘原修花はシングルマザーのプログラマーで、父親とは人生で二回しか会ったことがない。腹違いの妹たちの方がよほど定期的に会っている。

それはともかく、去年の春あたりに母さんと真尋さんが付き合い始めたらしい。いわゆる社内恋愛というヤツだ。

年末年始のあたりから、俺も真尋さんとお会いするようになった。

それで一昨日は婚姻届を提出したあと、おの家の子どもと合流して仙台駅へ。

社内カレンダーという悪しき風習が役に立った稀有な例である。

最後に、真尋さんは真綾の父親とのこと。結果、確認するまでもなく当然だが、再婚に伴い真綾は俺の義理の姉に……。

義理の……、姉に……。

恋していて……、告白も、しようとして……。

「って、こんな展開、予想できるか！ 予想できたらそいつの頭脳は神にも等しい！」フン、まあ、嘆いていても仕方がない。

不平不満を他人や世界にぶつけたところで、自分や現実はなにも改善しない。

そして現実が改善しないということは、不平不満が生まれ続けるということだ。負のスパイラルなんて時間の無駄だし、どこかで区切りを付けなければ。

というわけで、脳内会議を始めよう。

まず、血縁関係がないゆえに、義理の姉と弟は結婚できる。

しかし、それは法的に問題がないだけだ。

一般的な理解が得られるとは、あまり考えない方がいいだろう。

それに、事情を知られて余計な首を突っ込まれても困る。

いかんせん、同じ教室から義理の姉弟が誕生するんだ。

日常会話の延長線上にある冗談だろうが、ウソ偽りない嫌がらせだろうが関係ない。なにかしら、俺と真綾の関係を勘ぐるような会話が多発するだろう。

感情的に思っても不愉快だし、論理的に考えても、計画に支障が出るのは論外だ。義理とはいえ姉弟なんて、周囲からの好奇の視線は免れない。

クラスメイトにバレた刹那、全てを茶化され未来は闇に包まれるだろう。

俺に友達がいけないことなんて些事にも値しない。

匙から砂糖を落とすと蟻が群がるのと一緒だ。

「しかも、これに加えて恋愛感情、か」

弟が義理の姉に初恋を捧げている。

俺は自分の感情を、恥じるようなモノとは思っていない。

しかしそれでも、からかうヤツはからかうし、盛り上がるヤツは勝手に盛り上がる。

その視点から考えても、俺と真綾の関係は今まで以上に秘密にするべきだ。

小学生の頃、女子と一緒に下校した男子が、同級生にからかわれることがあった。

起きうる未来はその延長線上にあるのだろう。人間、高校生になった程度では、生きるのが上手くなっただけであり、案外やることは変わらないと俺は考えている。

「可能性の話ではあるが、コストとリスクを天秤で量れば、やはり隠すべきか」

これは俺の初恋だ。

真綾を含め、周囲に迷惑さえかけなければ、俺の好きにして咎められる道理はない。

徒勞に終わればそれでいい。

姉弟という形も、好きという想いさえも！

あまねく全てを俺は秘密にしてみせる！

「——っ、ああ、やはり気持ちの方は、真綾にこそ秘密、だよな」

いろいろ複雑だが、好きな相手と一緒に暮らせるんだ。

カップルや夫婦としてならベストだったが、当然、嬉しくないわけがない。

だが、真綾の方はどうだ？

多少親しくても、やはり同年代の異性と一つ屋根の下、というのは不安だろう。

一昨日も同じようなことを考えた。

そして姉の正体が真綾と知った今でも、その考えは変わっていない。

見知らぬ相手ではなかったとはいえ、同級生が同じ家で暮らし始めるのだ。

いや、俺が真綾と結ばれたいという前提がある以上、より問題があると言える。

「俺は、真綾が好きだ」

しかし一般的に、弟は姉に恋をしない。

そして、それは姉の方も同じなんだ……ッッ！  
実際に姉弟になって、今後を想像してみても痛感した。

当事者として姉弟で恋愛するなんて、理屈の上では大丈夫でも不安が大きい。  
だから相手が絡んできても、それは姉として。

そのことを常に意識して、演技し続けなければならぬ。

嗚呼、もう、理解している。

これから始まる全てにおいて、俺の気持ちを一番に秘密にすべき相手は、真綾本人だ。

互いに信頼し合っているが——それだけではどうしようもない壁があるんだ！

「狙っているバレて、嫌われたくはない」

しかし、希望はある。

家で仲良くしないわけではないが、それでも俺たちは書類上の、形だけの姉弟だ。

別に親友同士だった約一ヶ月がなくなるわけでもない。

ならば！

結婚まで突き抜けてしまえば問題はない！

いや、まあ、流石に、自分でも非常識な答えだと思うが……。

「それでも人は、自分や、関係の呼び方に、こだわるモノだ……ッッ！」

たとえば、当然、俺は俺に変わりない。だが、修一郎くんと呼ばれるのと、小学生の頃のように悪く言われるのには、雲泥の差があるだろう。

だからこだわる。

真綾と籍を入れたと思う。

望まない形の同棲なら、望む形の同棲に変えてみせる。

同級生にバレた場合も、俺たちが姉弟だからこそ、普通と比べて興味関心が増幅する。  
だから少なくとも、姉弟であることは卒業まで隠し通す。

真綾に関しても、まだ弟、恋愛の対象外として分類されたとは限らない。

だからこちらは、関係が固定化されるより早く、ハッピーエンドに辿り着く。

手を打たれる前に手を尽くせ！

弟になってしまいう前に、今度こそ佐藤真綾と結ばれる！

完璧だ……ッッ！

流石にまだ計画とは呼べないが、方針としては微塵の隙さえない完璧なモノだ！

俺にはできる。

いや、俺にしかできない！

「——そうだ、最悪の窮地に立たされたことは、諦める理由にはならない」



わたし、佐藤真綾は今日——、

——ずっと好きだった男の子、柘原修一郎さんと同棲することになった。

お風呂場で一人になって改めて思うと、少しボーっとしちやあって、わたしは湯船に沈んでいく。

が、ほんの数秒で顔を上げて、身体からだの火照りはてを誤魔化すように大きく息を吸った。

「ぶはあ！」

ヤバイ、ドキドキしてきた。のぼせてもきちゃった。

えっ？ 同棲!?

いや、わたしは前から知っていたけど——ダメかも。

心の準備はできていたはずなのに。

意識しちやあって、勝手に口元がにやけちゃう。

胸が高鳴って、赤面した顔が鏡に映って……嬉うれしくて、緊張していて、期待もしてる。

「少し落ち着かないと上がれないね、これ」

わたしと修一郎くんは学校ではクラスメイトで、お家うちでは義理の弟とお姉ちゃん。

もちろん最初はビックリしたけど、さ。

考えてみれば、そんなのどっちでもいいことに気付いた。

だって当然——、

「——やっぱり人との関係で、一番大切なのは気持ちだと思う」

もちろん同棲できることはすごく嬉しい。

そして、わたしが修一郎くんのことを好きって気持ちも変わらない。

だから、姉と弟の関係になったことも、気にすることはない。

むしろ姉弟になっていいことづくめだと思う。

お家に帰れば、お父さんとお義母かあさんの仕事が終わるまで二人きり。

「しかも今のわたしには——新しくできた弟と仲良くしたいお姉ちゃん、そんな最強の建

前がある！」

もちろん、義理だとしても、普通の姉弟がしないようなことも考えている。

だって、想いは変わっていないから。

けど……不安なことがないわけじゃない、んだよね……。

「うーん、男の子ならアレ、普通は嬉しいはず、だよな？」

ふと、わたしの視界に家族四人分のシャンプーが入った。  
わたしのシャンプーの隣には、修一郎くんがいつも使っているらしいシャンプーがある。  
むう……、わたしはシャンプーを見ただけでドキドキしているのに――、

「――修一郎くん、全然、ドキドキしてなさそうだったなあ」

自分の胸を両手で軽く寄せて谷間を作ってみる。

わたし、魅力なかったのかなあ？

今朝、一瞬だけわたしの胸の谷間を見て動揺したのは、こっちも知っている。

けど、仮にわたしが実姉でも、胸元が見えちゃったら男の子は焦るあせような気もする。  
だから、違うのかな？

焦ってくれたのは、むしろ嬉しいし、わたしが望んだこと。

じゃあなにがモヤモヤするのかって言えば――、

「たった二日で、恋愛対象として見られなくなっちゃったのかなあ？」

驚いたあと、なぜかすぐに平静そうに振る舞われちゃった。

わたしと修一郎くんの場合、三日前までは友達以上、恋人未満だったのに……。

「けど、だからこそ、どっちにしたってやることは変わらないよね」

経緯はどうあれ、好きな人と一つ屋根の下で暮らすことになったんだ！



こんな最高のチャンス、絶対に逃すわけにはいかない！  
友達にこの関係がバレたらマズイけど、なるべく家に友達を呼ばなければいけないだけだ。  
やっぱりプライベートなことだし、個人的にはあまり知られたくない。  
ていうか、根も葉もない変なことを噂うわさされるのがイヤだ。  
もつと言うなら、ホントに修一郎くと結ばれても、自分たちのそういうことを面白おかしく言われたくない。

「うーん、やっぱり最後に悩んじゃうのは、修一郎くんの気持ちなんだよなあ」

実際、こっちが先に知って、限界のギリギリまでわたしが義姉になることを隠しても、告白もラブレターもなにもなかった。

仮にわたしが振られた場合でも、わたしたちはそのあとも、姉と弟としてやっていく。そうなっちゃったらすごく気まずい。

つまり、告白できる回数はたったの一回。

なら当然、向こうの気持ちをどうにかして確かめたあとにしか、告白はできない。でも、チャンスはある。

ううん、この同棲、チャンスしかない。

「——うん、最高のチャンスなんだ。だからこそ、攻めて攻めて攻めまくる！」

続きは、9月19日発売のファンタジア文庫で！

©Uta Sakura, Natasha 2020